

西双版纳傣族自治州の民族観光における文化表象の交錯 民族であるための方法について

前田直人*

Mingling of Cultural Representation of Ethnic Tourism in Xishuangbanna Dai Nationality Autonomous Prefecture

MAEDA Naoto*

Abstract

This article deal with the relation of cultural representation and people engaged in tourism spot in ethnic tourism of Xishuangbanna Dai nationality autonomous prefecture located in the southwest China.

Ethnic tourism is the place constructed by the “Nationality” regulation and the dynamics of cultural preservation for the formation of Nationality by the state or the government of Xishuanbanna. And the cultural representation in ethnic tourism, it does not necessarily supported only by narrative of people concerned their “Nationality” because of the many “others” also concerns with this tourism area. If it looks from such perspective, it will be thought that the representation of culture is realized by the regulation of Nationality and the participation of people who is in Tourism spot. Then, a people who engaged in tourism spot presents culture, becoming a “Nationality” in the context it has set oneself, or keeping its distance to this “Nationality”.

はじめに

中国西南部に位置する西双版纳（シーサンパンナ）傣族自治州¹⁾は、観光産業を当該地域の主要産業と位置づけ、積極的な観光地建設を行っている。そこでは「緑の宝石」「動物王国」「植物王国」「地質博物館」「人類歴史の博物館」等、西双版纳における対外的に有効と見なされた観光資源を積極的に喧伝しているが、とりわけ「濃厚な民族文化」という文言はあらゆるパンフレットやガイドブックを彩っており、民族文化が

観光産業の中核を担う重要な資源になっていることがわかる。また、中国において1980年代から本格化した改革開放政策や、近年始まった国家的計画「西部大開発」の構想でも「観光地およびリゾートの建設」が重要な目標として明記されるなど、様々な要因が重なって西部地方では観光による開発が一層後押しされている。こうした潮流の中で、西双版纳をはじめとして少数民族が多く居住する西部地方では「民族文化」を重要な観光資源の核とした「民族観光」を展開している事例が数多く見受けられる。

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程

本稿で扱う西双版纳でも、1980年代から本格的に観光開発が胎動し、現在も「濃厚な民族文化」を核とする観光地の開発が続けられている。筆者がここで特に注目するのは、西双版纳における観光開発の趣旨として「参与性」が明記されている点にあり、観光客と少数民族である人びととの交流を重要視していたことである（中国科学院地理研究所、雲南省景洪市旅遊局編：1998、李長鳳：1995）。言うまでもなく「観光」とはホストとゲストが会おう場であり、何らかの形で「参与」という形態を含むことそれ自体が観光の性質でもある。ただし、ここで計画された「参与」が意味するものとは、村落そのものを観光地化する試みからもわかるように、さまざまな民族との現実的、日常的なレベルでの「出逢い」がその根幹に関わっていることにある。

「参与」を趣旨として展開する西双版纳の民族観光では、舞台の上で行われる劇やさまざまなパフォーマンスとともに、より日常的なレベルにおける観光活動がいつそう活発になっている。そこでは多くの少数民族が従業員として働いており、「民俗村」を含めたほぼすべての観光地で従業員は伝統的な民族衣装を身につけ、観光客に対する歌の披露、文化や伝統、習俗に関する説明を行い、観光客と自由に語らうことができるようになっている。ただし、観光地での従業員による民族文化の呈示（観光地における各文化の紹介、説明、演奏、披露等）は民族的には他者である人びと、つまり他民族によって担われている場合がある。また、当の「民族」である人びとにとっても観光地の経営形態や国家的に規定された文化保存の力学が、文化の呈示に対して制限

を加えるといった事例も惹起している。日常的な場における観光活動を含めたあらゆる観光地では、文化の呈示が上から規定された類型的な「民族」を準拠して形成されているのである。しかしながら、観光地で従事する人びとは労働といういわば文化呈示の実践のなかで、規定されたあるべき観光の脚本を演じることに徹しているわけではない。

本稿では、筆者が継続して調査を進めている西双版纳を事例として、民族観光の場における従業員の文化呈示に焦点をあて、観光地と従業員の関係について検討することを目的とする²⁾。具体的な手続きとして、まず観光研究の理論的側面を概観し、筆者の立場を明らかにした上で、従事者の観光地における文化呈示の一端を論じる。そして、民族観光が有する構造との関わりにおいて呈示される民族文化を読み解くという試みを経て、観光地と従業員の関係、特に観光地における文化保存の力学と従業員との関係を考察する。

観光の領域における主体と構造

これまでの民族観光を含めた観光研究の議論、とりわけ観光人類学の分野では1977年にヴァーレン・L・スミスが著した『観光・リゾート開発の人類学』がひとつの端緒となっており、これに倣う形で「ホスト-ゲスト」の交錯する場から「観光活動が現地に与えるインパクト」を捉えようとする見方が主流を占めるようになってきている。この視座は「切り売りされる文化」のように負の側面を暴露する形をとまなう場合が多かったが、近年の観光研究では観光地で従事する人びとの行為を「抵抗」や「戦術」

と捉え、「主体」としての従事者に焦点を当てる議論が増える傾向にある³⁾。しかし、近年の民族観光を扱った議論はこうした展開を踏まえつつも、なおある種のジレンマを抱えているように思われる。以下、これまでの観光研究を簡単にまとめつつ、この点について触れておきたい。

1 国家のなかの観光活動

日本では、インドネシアのトラジャにおける儀礼と観光活動の係りに早くから着目した山下晋司が、それまでの民族誌のありかたに疑問を呈し、観光の領域であられる民族文化の仔細な動きを国民国家との連関の中で考察することの必要性を唱えている。山下によれば「国民国家と国民文化という枠組を抜きにしては今日のトラジャ民族誌は成立しない」とし、「マクロなシステムを視野に入れた民族社会の研究」を「動態的民族誌」という用語で捉えている(山下1988:5)。国家の視点から見ると、トラジャの観光開発は「文化のパフォーマンス」をトラジャ社会の文脈から切り離し、外部者の視線を前提とした商品として客体化され、物象化の対象として位置づけられていくのである。

こうした山下の試みは、観光開発の過程で対象となる地域の文化や伝統が、国民国家という装置を経て、部外者にも広く開かれた形で形成されることを指摘したものである。また、当の人びとの語りでさえもこの装置との間で交渉される故に再形成されていくとことを指摘するなど、より大きな枠組での政治的な提起を含むものである。ただし、山下は観光文化を国家の規定による一方通行の力学によってのみ捉えていた

わけではなく、一方でトラジャの人びとによって形成された文化や伝統を捉えなおし、新たな文化を創造する過程をも同時に描いている。こうした見方は、観光における文化の真正さを問うよりも観光のために創られた観光文化に着目する視座と通じていると考えられる。

「多民族国家」を標榜する中国の事例では、各民族が有する個々の文化を観光の場で呈示する、いわば国策的とも言える基本的な民族的枠組を堅持している。したがって、観光地を訪れるゲスト側がこうした「多民族」という理解の枠組を前提とする限りにおいて、ホスト側の文化呈示は規定されることになる。このため、文化の呈示が類型上の「民族」を前提とすることで、個々の民族がその内部に持つ多様な支系、あるいは中国で近年増加している異なる民族間の結婚などが念頭に置かれることはない。つまり、本人の出自がいかなるものであれ、前提となる強固な文化呈示の枠組は従業員それぞれの語りをも規定することになるのである。ただし、この力は当の従業員にとって一概に「規定」となるわけではない。なぜなら、中国西部で進展する観光開発は、貧困からの脱却や少数民族のカテゴリに附随していた負のイメージを塗り替えるという意図を持っていたからに他ならない。観光産業が重要な現金収入の手段となっていることや、少数民族が明るく華やかなイメージで呈示されるのはこのためである。そうであれば、国家からの民族の規定と地域が観光地としての「西双版纳」を演出するために生成する文化との間には相互に符合するベクトルを持っているとしても、負の関係だけで一方的に取結ばれているとは限

らないのである。

確かに兼重努が指摘するように、貴州省における民族観光の事例では、中国の56民族のひとつを構成する民族としての「トン族」の「均質性」と、民族の分布がきわめて広範であるために貴州省に居住する「トン族」の「独自性」を強調せざるをえないという、二つの立場を共存させなければならない状況もあらわれている（兼重：1998）。それでは、このような国家と地域の双方でそれぞれに民族や文化を規定しようとするベクトルが交錯する民族観光の領域で、実際に従事する「民族」である人びとの行為はそこでいかなる関わりを持とうとするのかが問題になってくる。そこで、観光の場で文化の担い手となる「主体」についての問いに焦点が当てられることになる。

2 観光の領域における「主体」

観光がさまざまな力によって規定されるものであっても、人びとがアイデンティティや民族文化の価値を主体的に生産することで、観光のシステムに向けて積極的に交渉していこうとする行為に着目する議論がある。その契機となったのは、太田好信が1993年に示した「文化の客体化」という概念である。太田によれば、観光の場における「語り」という行為は、主体による選択的なものであって、自己の意志によって創造的に選びとられた結果として現出したものであるという（太田：1993）。

ホストがゲストに対して呈示する「文化」の真偽を問う議論に対する批判として出されたこの種の論法は、多くの観光研究で見受けられる。しかしながら、観光の場における「主体の戦略」という視座では、国民

国家の枠組やゲスト側が観光地にまなざすイメージに抵抗する力強い「主体」がくり返し強調されており、過度に主体化されている感が否めない。つまり、それまで「文化を破壊する」と非難され、抑圧された人びとの有り様を訴えた民族観光研究に対する反省が、逆に現代では過度の主体化、戦略化をもたらしていると考えられる。このような視座は、観光地における個々の語りは「文化」であり「戦略」である、という理解に収束する可能性を持っていることが指摘できる。それは「主体」という語彙によって現実を黙認することに繋がりがかねない。結果として、ここで排除されているのは観光地で従事する人びとの語りが導きだされた背景に対する理解であろう。

このような過度の主体化に対する批判の端緒としていくつか指摘しておきたい。それは「観光地 - 観光客」という限定された空間のなかで批判することが観光を学問対象とする上での専属的な領域であるのか、という点にある⁴⁾。ここまで、山下のように観光と国家を連関させて捉える視座がある一方で、観光が内包する力関係を認めつつ、人びとの主体的な営み（文化創造、アイデンティティ）を仔細に見て取ろうとする試みについても触れてきた。しかし、そうした営みが基底とするような日常をこそ視野に入れなければならないのではないかと。後述するように、西双版纳の民族観光では従事する人びと（ある少数民族の出自を持つ人びと）が決してその該当する民族文化の保有者であるとは限らず、そこにあらわれる「民族」は上述した民族出自の多様性を考慮してもなお多くの「他民族」で構成されていると言わねばならない⁵⁾。言い換え

ば、観光地における民族文化の呈示とそれを演じる従事者は必ずしも合致していないということである。それは、観光地が従事者にとっても新たな文化的経験となっていることを示している。また、西双版纳の観光地で従事する人びとに占める他省からの労働者が多く見受けられることも指摘しておく必要があるだろう。以上のことをまとめれば、個々の文化に関する語りは従事者の労働環境も踏まえる必要があると同時に、従事者に文化的経験を与えてきた観光地を含め、出身の村や町との関連性も考慮する必要があると言える。しかし、本稿ではこれらの問題点については指摘するにとどめ、ここでは観光地の歴史的な形成過程について触れながら、従事者である人びとの文化呈示との連関にのみ焦点を当てて進めていきたい。

これまで、観光を国家に埋め込まれた空間として捉えようとする視座、あるいはそのような状況が前提となっても、人びとの主体的な行為を看取することでより積極的な意味を考えていく視座のいずれも、そこで従事する人びとの行為を観光の構造に収斂させてしまうこと、また、過度の主体化は逆に観光を取り巻く構造を隠蔽してしまうことを指摘してきた。本稿の理論的課題として、これら二つの視座のいずれにも収斂しない形を模索したい。その見取り図をあらかじめ提示しておくならば、西双版纳の民族観光における文化の表象は、「民族」を規定する国家によって向けられたベクトルと、観光地自体が追随するようにして形成する文化保存のベクトルが交錯する場に立ちあらわれる。一方で、観光地に従事する人びとは、こうした規定の間に立ち

ながら、個々の置かれている状況に従って「文化」を語る。つまり、観光の場であらかじめ形成された民族や文化呈示に加担しつつ新たな文化的経験を獲得し、時にはそこから距離を置く主体としてあらわれるのである。

西双版纳の観光開発と文化表象

1 西双版纳傣族自治州と観光開発への布石

西双版纳傣族自治州は1955年に成立した民族自治州で、2002年現在で約90万人の人口を有している。観光地で配付されているパンフレットの紹介では13民族が居住するとされているが、その他にも克木人などの未識別民族や、内陸部から移住してきた諸民族も民族統計の項目にあらわれている⁶⁾。これらの民族構成は大別するとタイ族が全体の35%、漢民族が25%を占め、残りが他の少数民族となっており、とりわけ漢民族については中華人民共和国が成立した1949年以降、この50年余りの間に急激に増加したものである。これらの漢民族移住者は、建国以前から茶商人や開墾を目的として移入したと記録されているが、特に40年代に入ってからには民国政府陸軍が駐屯し、そのまま現地で婚姻したのち定住した結果、漢民族の増加につながった。また、建国以後については当初、教師や医師、科学技術員が移入し、そののち国営農場の建設を目的とした知識青年が昆明、貴州、四川や湖南省などから大量に移入したことを契機として、漢民族人口が急激に増加している（景洪県地方誌編纂委員会編：2000）。しかし、近年は「民工潮」や「盲流」と呼ばれる求職を目的とした人間が大量に流入し、都市部にはさらに大量の漢民族が居住する結果とな

っている⁷⁾。こうした漢民族移住は後述するように、観光地の経営形態や雇用などに大きな影響を与えることになる。

西版纳における観光産業の胎動は『西版纳五十年』によると、1978年に州が「全州旅遊外事工作会議」を開催したことを皮切りとして、1985年に国家が景洪、勐海両県を外国人解放地区として承認したことを第一歩としている（中共西版纳州委党史征集研究室編2000：199⁸⁾）。その後、同年の7月には西版纳傣族自治州旅遊局が発足し、観光業の管理体制が整備された。一方、1980年代後半にはヤオ族の「盤王節」、アイニ族の「嘎汤帕節」、ジノ族の「特懋克節」が相次いで国家、または州政府の承認を受け、中国における正式な民族の祭りとして認知されている。こうして民族や文化に対する国家的な承認が進められていく中で、西版纳の大型観光地としては初となる「西版纳州民族風情園」が1988年に開園する。そして、1990年代に入ってから空港の建設、主幹道路の整備、宿泊施設や観光地の建設が次々と進められていくことになるのである。

このように、観光開発の背景として西版纳の成立過程における民族と文化に対する承認の動きについて見ると、1980年代からの20年は西版纳の民族や文化に国家的な承認を与えながら開拓と建設を進めた、いわば中国を構成する西版纳としての自覚に基づいた「西版纳化」の過程であったと言える。また、こうした過程を経ることで民族文化を核とした観光開発の下地は形成されたのである。そして、この形成の歴史が西版纳の民族観光を規定するための土台になったことは確かである。以下

では、これらの背景も念頭に置きつつ、三つの観光地を中心に扱うことにする。

2 民族風情園 - 観光地への転換

西版纳州民族風情園は、民族文化を展示する民族展覧館を中心とした公園型の観光施設だが、この公園自体ははじめから観光地を意識して造られた施設ではなく、1958年に植物栽培を主とする科学研究機関としての役割を果たしたあと、1987年に観光サービスを主とする経営に転換し、翌年に開園したものである（村上他：1997）。今日では、州の城建設環境保護局に属しており、企業化された管理を行う企業単位となっているが、いずれにせよ民族風情園は西版纳が成立した初期の時代から開拓や発展の一翼を担っていたことになる。そして、観光地となった現在ではこうした背景を継承し、移住者であった漢民族の手によって運営され、舞台上で上演される民族舞踊や展覧館における文化呈示にいたるまで、一連のパフォーマンスの決定に関わっている。

園内に目を移せば、そこでは内陸部で見ることのできない孔雀や象も飼育されているが、中心となる施設は6つの少数民族展覧館で、「タイ族」「ジノ族」「プーラン族」「ハニ族」「ラフ族」「ヤオ族」の6民族から構成されている。では、西版纳には13民族が居住するとパンフレットなどには記載されているが、はたしてこの6民族が選ばれた意図はどこにあるのだろうか。個々の民族ごとに、その特徴を列挙した上で西版纳における位置づけや、中国成立以前の居住、移住過程などから明らかにすることもできるが、西版纳の民族統計でもその一端を垣間見ることができる。例えば、図

図1 西双版纳タイ族自治州における民族構成（単位：人）

	西双版纳	全国
漢族	220,655 / 26.02%	1,137,386,112
タイ族	292,728 / 34.52%	1,158,989
ハニ族	160,109 / 18.88%	1,439,673
ラフ族	48,423 / 5.71%	453,705
プーラン族	35,911 / 4.23%	91,882
イ族	37,421 / 4.41%	7,762,272
ジノー族	18,042 / 2.13%	20,899
ヤオ族	15,858 / 1.87%	2,637,421
回族	3,215 / 0.38%	9,816,805
ベ-族	2,735 / 0.32%	1,858,063
ワ族	1861 / 0.22%	396,610
チワン族	1721 / 0.20%	16,178,811
ミャオ族	1807 / 0.21%	8,940,116
リス族	359 / 0.04%	634,912
ジンポー族	232 / 0.03%	132,143
ナシ族	151 / 0.02%	308,839
モンゴル族	194	5,813,947
ブイ族	230	2,971,460
その他	6243	

（出所）『西双版纳傣族自治州統計年鑑1998』（1998）、『中国統計年鑑2002』（2002）より筆者作成。

1に掲載した民族統計では、人口優位に立つ民族が民族展覧館の構成要素としてあらわれていることがわかる。また、人口が相対的に少数であっても、西双版纳を主要居住区とするジノー族なども対外的には有効な観光資源として呈示することが可能である。この人口における優位性から取捨された結果は、先の国家的な民族と文化の承認とも符合していると言えるが、逆に西双版纳の観光地で語られる「13民族」はこれらの選ばれた少数民族が結果として代表することになり、その他の民族が観光地で表立つことはほとんどない。したがって、ここでも国家的な視座から見れば、中国全土の民族統計との対比から、対外的に有効な「徴」が丁寧に選択された結果としての「6民族」だということが指摘される⁹⁾。

こうして設置された民族展覧館は、各民族が伝統的に継承する固有の家屋を模して造られ、内部には伝統的な器具や民族衣装が並べられ、観光客は自由にそれらを見ることが出来る。そして、団体観光客が訪れ

た場合には専門の、当の「民族」である人びとに解説を加えてもらえるシステムになっており、他の観光地にある民族展覧館も同様である。ただし、展覧館によっては催しものが行われることもあるため、その展覧館には十数人の従業員が待機している。もちろん、観光客はここで行われるさまざまな催しに参加することができる。現在この民族風情園で行われているそうした催しには、タイ族の新年を祝う祭りである「水かけ祭り」やプーラン族の「結婚儀礼」、ラフ族の薬草による「マッサージ」があるが、ここで取り上げたいのはラフ族のマッサージについてである。

ラフ族展覧館では、薬草マッサージのサービスのために7、8人の従業員が常駐しているが、文化の説明を行うのは父母ともにラフ族である女性で、筆者とはすでに3年ほどの親交がある。彼女は、観光客に対して自文化の説明を行い、質問に受け答えをし、写真にも愛想よく応じているが、薬草のマッサージサービスにはいっさい関与

していない。ここで関与しているのは出稼ぎの漢民族女性4人で、やはりラフ族の民族衣装を着用している。彼女たちも同様に、観光客に対してラフ族の伝統や文化を歯切れよく説明し、観光客の足を薬草入りの水で洗うのである。これを「泡脚」と呼ぶが、看板の説明書きによれば「仕事で疲れた夫の足を妻が薬草で洗い、疲れを癒した」という、ラフ族の伝統的な習俗のひとつだそうである。一方、出自上はラフ族である彼女は「泡脚のやり方さえわからない」ということであった。つまり、「ラフ族の伝統的な薬草マッサージ」は観光地でこれを会得した漢民族女性によってすべて担われていたのである。

こうした当該の民族ではない人びとによって文化の呈示が担われる事例は、民族風情園以外でもほとんどの観光地で見ることができる。ただし、それは漢民族による代替という問題だけではなく、他の少数民族も数多く混交していることを指摘しておかねばならない。場合によっては「プーラン族展覧館」に「ヤオ族」の女性が働いていることもあるからである。また、少なくとも筆者が調査した場所で出逢った彼女たちの出自は「民族」を越え、多様そのものであった。ここで、筆者が出逢った人びとの出自を列挙しておきたい。

- ・ 父母ともに少数民族を出自とする女性あるいは男性
- ・ 漢族と結婚している女性
- ・ 漢族と少数民族との婚姻によって生まれた女性あるいは男性
- ・ 州外からやってきた同系民族である女性
- ・ 国外からやってきた同系民族である女性または男性

・ 漢民族である女性または男性

このように、観光地で働く人びとの出自の多様性（ここでは主として民族間の結婚）は既に珍しい傾向ではなくなっている。つまり、ゲスト側の視点から理解される「民族」は、ホスト側から実践される「民族」との間ですれ違ふように見えるが、双方から類型的な「民族」に加担しているとも考えることもできるのである。言うまでもなく、出自上はもっとも相応しいと思われる人びとが民族観光の性質によって一部の民族展覧館、または観光地そのものから排除されていることが指摘される。しかし同時に、民族観光の場では、類型上の「民族」に双方が加担するようなベクトルが向けられているとも考えることもできる。では、このように創られた場所ではない、村自体が観光地化する事例を次に取り上げてみたい。

3 傣族園 - 「民俗村」の試み

西双版纳傣族園は州都である景洪市の東に位置する勐罕にあり、曼春満というタイ族の村落を中心に形成されている。当初は三つの仏教寺院が立ち並び、それぞれに入園料を払って参観するシステムであったものが統合され、1999年に「民俗村」の構想を受けて開園した。曼春満の村落住民は自治州政府から観光地指定を受けると、近隣の村落と共同で美化に取り組み、四十二万元を総経費として計上した。そのうち二十四万元を州政府が、残りは曼春満を含む七か所の村落で負担している（長谷川：2001）。また、経営はタイ族村落、広東省の東莞信譽実業公司、国营農場による共同経営を採っているが、このような経営方式がはじめから前提となっていたわけではなかった。西

双版纳州政府は観光開発の展開に際し、積極的に他省からの投資を求めており、広東省の東莞信譽実業公司も西双版纳政府が度々開催している辺境交易貿易会の期間に提携を取り交わしたもので、1.5億元の資金で建設を進めた。しかし、公司の資金調達が行き詰まり、結果として農場が資金援助に乗り出したという経緯がある（中共西双版纳州委党史征集研究室編：2000）。とはいえ、西双版纳における多くの観光地が他省の投資によって成立していることに変わりはなく、経営戦略から観光客に対する文化呈示にいたるまで一貫して他省企業の意向が反映されている。

さて、この傣族園も同様に「濃厚な民族文化」を核としていることは言うまでもないが、前述の民族風情園と異なるのは、仏教寺院を含めたタイ族村落をそのまま「民俗村」として観光地化したことにある。つまり、博物館的な要素を求めてではなく、村落をそのまま観光客に開放するという形式を採っているのである。こうした試みは、当初から「参与性」を重視していた政府側の態度から一貫したものである。しかし、こうした日常的な生活の場でも観光地化や政府の観光政策による民族的、文化的な意味づけを与えられていることがうかがえる。

園内に入ると、村落の至る所に「どうぞ二階へ、参観してください」という看板が掲げられており、美しいタイ族の伝統衣装に身を包んだ女性が観光客を待ち構えている。筆者が一件の家屋に入ると、そこは民族展覧館にはない生々しい生活の跡が見受けられる。VCDや大きなテレビ、一面に張り詰められた塩化ビニル製の床敷き、カラオケセットなどが置かれており、明らかに

風情園のそれとは異なる趣である。また、家屋内中央では観光客が座るために置かれた座椅子とテーブルがあり、伝統的なタイ族風のお土産物が山のように積まれていた。筆者を案内してくれたタイ族の女性は、これらを手にとって「タイ族の民族文化、伝統文化」なのだと言って購入を勧めてくる。意外なことに、民族展覧館では聞けたような人びとの生活習慣や現在の流行、自分の村の話にはまったく取り合ってもらえなかったのである。

一方、村内深く立ち入ると、タイ族の民族衣装で正装した子どもたちが観光客を相手に写真を撮るサービスや、タイ族の音楽隊による華やかな演奏、織物に精を出す老女のほかに、路上で竹に教典を彫り込む僧など、タイ族的な活動が観光客の出入りに応じて行われている。民族風情園では見られることのなかった、一般村落でのこうした過剰な演出には観光地化が深く根ざしていることに変わりはないが、具体的には二つの理由が原因として考えられる。まず、傣族園として観光地化したものの、村内で生活し、土産物の販売をする人びとは入園料などの恩恵を受けることができない、との話を筆者が訪れた家のタイ族女性が話してくれたことである。したがって、家屋内で土産を売ることが収入源になるため、全身をタイ族の伝統衣装で包み、観光客に対してアピールすることが不可欠なのだという。

そして、傣族園が2002年7月に「綠色家園模範家表彰式」を開催したことである。これは傣族園内に居住する5つの村落307戸の村民に対し「タイ族の伝統的な住居の完全なる保存と、タイ族人民が有する生態的な

自然居住は観光資源の基礎である」ことを謳い、その中でも積極的に住居等の建築物や村落に対する緑化、美化、保存を行った20戸に対して表彰したのである（西双版纳報：2002.7.12）。この活動と相まって、住民の観光客に対する活動の様相は大きく変化した。筆者が最初に訪れた1998年当時と比較すると、園内の雰囲気が一変したのはこのためである¹⁰⁾。

観光客が西双版纳の観光に「参与」できるよう配慮されていることは、すべての観光地にほぼ共通して見られるが、傣族園のように日常的な生活の場としての村落を観光地として機能させることは、村落に居住する人びととの交流を図ることができ、より現代的な理解を促す試みとして興味深い。

しかし、観光活動における「ホスト - ゲスト」という関係が前提にされていること、また現金収入のための手段となっていることにより、村落住民によって民族文化の積極的な商品化が進められていることもまた事実である。確かに、傣族園側から「緑色家園」という御墨付きを与えることで、歴史的に受け継がれてきた民族と文化の保存をさらに進めようとする意図は理解できる。しかし、日常生活の場である村落を観光地化することで、結果として日常そのものを歴史的な「民族」の文脈によって囲い込むことになっているのである。ただし、そこで観光客を相手にする人びとがこうした状況を悲観しているわけではない。あるタイ族女性は、これでお金を貯めて将来は省の大学に行くのだ、と筆者に力強く将来の夢を語ってくれた。このように、村落の生活空間における民族文化の現実理解という呈示の仕方が、ゲスト側の満足感をみやす

方で、当の住民にとっては生活の場にながら観光に携わることになり、生活の空間にまで「観光文化化」が進行していることがわかる。

4 原始森林公園 - 「民族」になる場所

西双版纳原始森林公園は1999年5月開業した、宿泊施設も完備する公園型の総合施設である。この森林公園も傣族園と同様に、浙江省の金洲グループの投資で建設されている。ここでは熱帯の原始森林をそのまま観光地化し、植物園や孔雀園も整備されている。このため、民族観光とともに環境観光（エコ・ツーリズム）の要素も多分に盛り込まれているが、他の観光地と同様に民族文化の展示や民族舞踊も行われている。他の観光地と異なるのは、民族展覧館という様式ではアイニ族に限られていることである。舞台での民族舞踊や劇の上演には他の民族も出演しているが、ここではこのアイニ族展覧館で働く女性についてのみ触れておきたい。

2002年8月当時、展覧館には28人のアイニ族女性が従事していた。このアイニ族展覧館では結婚儀礼のパフォーマンスと文化の紹介が行われており、そのため多めの人数が確保されているのである。彼女らは自分たち専用の宿泊施設を園内に与えられ、日常生活のほとんどをこの園内で過ごすことになっており、大半が山村からの出稼ぎである彼女たちが里帰りのために与えられる時間は年に数えるほどしかない。もっとも、同村からの出身者も多いため、寂しさを感じることは多くないという。そのなかで新しく入ってきた18歳の女性は、漢族の父とアイニ族の母をもち、北京語による教

育を受けていた。そのため、アイニ語にはまったく通じておらず、観光客の歓迎時に歌うアイニ歌も歌えないので、暇を見つけては職場の先輩が漢字であてたアイニの歌の歌詞を暗唱していた。つまり、出自は「アイニ族」であっても観光地ではまだまだ「アイニ族」として働くには不十分であり、ここでさまざまな訓練を受け、アイニ族について学び、そうして「アイニ族」になってゆくのである。彼女の話によれば、このようにアイニ語に通じていないアイニ族の人間は少なくないという。だとすれば、民族観光が文化保存の役割を果たすと同時に、ここでは文化の保存だけではなく、人間そのものをも「民族」にさせるような機能さえ合わせ持っているということが出来る。その意味で「民族」は観光地を通して形成され、出自の多様性はこのような類型の最大公約数的な枠組のなかに収斂するのである。

さて、原始森林公園は内陸部からやってくる団体観光客の旅程に、かならず組まれるほど人気の高い観光地となっており、西双版纳における観光地がどれも似通った造りであるなか、環境観光との組み合わせによって差別化を図ることで成功した事例であると言える。団体観光客が到着すると、アイニ族の女性たちはアイニ語の伝統民謡で出迎え、まず二階へ誘導する。ここでは、西双版纳におけるアイニ族の文化や風習、人口などが説明された後、再び階下に降り、そこで結婚儀礼に参加するのである。ここで行われる結婚儀礼は、従業員側のアイニ族女性と観光客側の男性との間で行われる（男性の妻は見ているだけである）。この儀礼の詳細について詳しく触れる余裕はない

が、この儀礼自体は異種混交的なもので、雑多なものの組み合わせで成り立っていることに注目したい。具体的には、この儀礼の内容自体、例えば民族風情園で行われているプーラン族の結婚儀礼と大きく変わった点はなく、結婚儀礼のフォーマットにアイニ族の吉祥をあらわす黒色（黒い紐、黒い墨など）が儀礼の過程で盛り込まれているだけである。また、儀礼の最後にアイニ族女性と観光客が「雲南民族の踊り」と説明される「三蹠脚」を踊ることも注目すべき点である。というのも、「三蹠脚」はラフ族の新年祭で踊られる伝統舞踊だからである。それが観光地の儀礼では「雲南民族の踊り」にまで拡大されていることになる¹¹⁾。こうした事例はラフ族の「三蹠脚」に限らず、タイ族の「水かけ祭り」も同様に、「西双版纳の祭り」として西双版纳化、雲南化して語られているという現象を見ることが出来るのである。

交錯する文化表象

西双版纳の民族観光では、一方で民族風情園に建設された展覧館のように博物館的な、いわゆる歴史的な文化保存を前提とした文化呈示の方法があり、他方で現在の場に触れ、人びとの生活を垣間見ることにより、理解を促していくことを目的とした文化呈示の方法があることを見てきた。

昨今の中国では、西部と沿岸部の間の所得格差が拡大していると報じられている。これは、西部大開発の主旨が指し示すように、西双版纳を含めた西部における観光開発の背景には貧困からの脱却、少数民族につきまとうネガティブなイメージの払拭、あるいは建国以来続けられてきた民族政策

の成功を大々的にアピールして見せることと密接に関係している。これに加え、観光地の経営には他省企業からの出向者や農場が密接に関わっており、国家と地域が連携して西双版纳を組み上げている。結果として、こうした枠組は観光地に対する大きな働きかけとなる。例えば傣族園の事例で論じたように、タイ族の文化保存に御墨付きを与えて奨励することで村落住民は生活の場にながら、同時に「民俗村」という観光地に留まることになっている。

観光文化の生成を肯定的に論じる意味はこの点にある。例えば、川森は観光文化について、「支配的な力が日常生活に容赦なく浸透してくることに防波堤として機能することが可能である」(川森2001: 80)と指摘している。もちろんこれは当事者にとって操作可能な対象として確立されるならば、という前提にたつてのことである。ただ、「観光文化」として日常の隅々までがその対象となり、政府の御墨付きや現金収入が目的とされる限り、操作可能な対象として生成する「観光文化」の可能性が、どこまで村落住民に開かれたものになるかは今後の展開を待たねばならない。また、これに比べるならば民族風情園の事例では、生活の場としての日常と観光文化との関係は密接で切実な問題として立ちあらわれてはいない。むしろ、生活の場から切り離され、観光地として用意された場のほうが、「民族」から自らを切断することさえ可能である。言い換えれば、自らに根ざした「民族」と観光で呈示される「民族」を自由に行き交うことができる場でもあったのである。

しかし、民族文化が西双版纳化、雲南化

して呈示される事例で扱ったように、従事者の民族出自に関わらずここではさまざまな他民族による呈示が許される場となっている。これまで、民族文化の呈示が漢民族を含めたさまざまな民族にとって代わられていた事例、そして、観光地が出自を越えた「民族」を引き受ける場となっている事例を指摘した。しかしながら、他民族による呈示が認められたとはいえ、観光地において文化を呈示する行為自体、限られた人間によるものでしかない。つまり「他者」による呈示は、もっとも適当であるはずの民族出自である人びとを排除した上で成りたっていることに留意する必要がある。そこで、西双版纳の観光地でわずかにあらわれる「ワ族」について述べておきたい。

本稿で扱うことのできなかったその他の観光地の舞台ではワ族の舞踊が行われているが、ここで役柄を担うのはほとんどが漢族かタイ族である。その背景に、宿泊施設を含め、観光地の就業条件に「学力」や「身長」が必ず明記されていることに一因があると考えられる。ワ族は州内でも国境付近に居住していることに加え、普通教育が未だ十分に行き届いていないため北京語にも不自由であり、観光地で働くことは難しいという。このため、民族的な「他者」による文化呈示を観光の場に限定するならば、民族観光が有する排他的な特徴を捉えきれない。こうした民族観光の場に従事するためには、身長や学力など一定の労働条件を満たすことが求められる。したがって「他者」という場合、観光の場を越えた周縁性を配慮しない限り、民族的には他者であっても、その出自に関わらず安易に主体的な他者として扱ってしまう危険性をはらんで

いると言える。

西双版纳の民族観光はこれまでくり返し述べてきたように、国家と地域の密接な関係のなかで最大公約数的な「民族」が形成されている。しかし、従事者による文化呈示の経験は形成された「民族」と意識の上で共有されているとは限らない。つまり、一方でワ族のように観光の場からも排除される構造を有していることを考えると、このような形成された「民族」と従事者の間にどれほどの距離が結ばれているかを問わなければならない。筆者が従事者の文化呈示を「加担」として捉えたのはこのためなのである。

おわりに

これまで、民族観光における文化保存の力学と従事者の関係について考察してきた。西双版纳の観光業は1980年をその契機とするならば現在でまだ20年の歳月しか経っていないことになり、観光地としてはまだ発展期にあると言える。とは言え、その歴史的展開は中国の成立、発展とパラレルな関係を認めることができる。つまり、民族の国家的な承認から発展に向かう一連の動きと貧困からの脱出がそれである。また、現在の中国にける民族政策は、いまだに一部の未識別民族がいることを認めつつ、現在では「中華民族」の形成に向かおうとしている。この「中華民族」を構成する各民族に対し、肯定的な認知と発展とを与えるために民族観光は絶好の手段であったに違いない。そのため、必然的に56民族はその守られるべき大前提として保存と確立へ向かうことになる。西双版纳の民族観光ではたらく文化保存の力学にはこうした国家的な動

きと常に連動しているのである。

だが、民族観光が文化保存の力学を内包していることを認めた上で、従事者の文化呈示がこの力学にどう対応していくかが問われたとき、西双版纳の事例では観光地における民族文化の呈示が従事者自身に共有された文化として呈示されているわけではなく、むしろ多様な出自を持つ人びとが文化の呈示に加担しているということが指摘できる。つまり、観光地で呈示される民族文化と担い手としての従事者が同定するとは限らないのである。また、そこにはさまざまな呈示のありかたが看取されたものの、「せざるをえない」状況があったことも考えれば、安易に主体の賞賛をすることはできない。このように、混交する他者と排除された他者という重層的に仕組まれた構造のなかで、西双版纳の民族観光は上からの規定と下からの加担、それも限られた人間の加担によって形成されていると見ることができる。とりわけ「加担」という主体の関わり方は、観光地と従事者の関係がすべて「民族文化」をめぐる問いのなかへ還元できないことを意味している。民族の出自だけでなく、個々の置かれた生活条件もまた観光地に対する関わりかたに対して大きな意味を持つのである。観光地は国家的な「民族」の規定や、文化保存の力学によって形成された場であり、多様な出自に関わらず「民族」へ収斂させる装置である。しかし、従事者は傣族園で見たように、現金収入のための労働として「民族」に加担することもある。また、民族風情園や原始森林公園で取り上げたように「民族」を経験する場として捉えることもできるのである。

本稿ではまだ不備な点も多く、これ以上

述べることはできない。課題として残されているのは、まず観光を規定する動きとして述べた国家、州の観光政策について十分な言及がなされていないことが挙げられる。また、「民族」をどのようにして捉えようとしていたかについて触れることができなかった。この点については観光地ごとに行われた展覧館を建設する際の、家屋を含めたモノの収集過程を把握することでより詳細な意図がつかめるはずである。そして、近年は中国沿岸部のみならず「源流」を求めてタイからやってくる観光客が増加していることも注目される。このようなゲストが西双版纳に求めるイメージについても検討の余地が残されている。一方、従事者の個別具体的な事例は今後の展望となる。さらにこの視座を押し広げるならば、観光客側から見た観光研究だけでなく、従事者にとっての観光を多面的な視点から考察することが今後の大きな課題である。この二つの側面から読みなおしを進めたとき、民族観光の場は異なる姿で見えてくるはずである。

注

- 1) 「西双版纳傣族自治州」という地域名称は研究者の採る立場によって「シーサンパンナ」や「シブソンパンナー」のように、地域の主要民族であるタイ族の言語、タイ・ルー語音を用いる場合がある。本稿において筆者は西双版纳を中国の国家的な関わりにおいて把握することから漢字表記を用いる。民族呼称については片仮名を用いるが、表記中の「傣族」はタイ族の漢字表記である。
- 2) 西双版纳におけるこれまでの調査は2001年の2月と8月、そして2002年の8月の計三回、約5ヶ月間にわたる。本論文は、この調査の過程で得られた観光客と従事者とのあいだで行われる文化呈示

の観察や従事者に対する聞き取り調査にもとづいている。なお、観光客と従事者の会話は北京語で行われている。また、筆者が従事者に対して行う聞き取りにも基本的には北京語を用いている。

- 3) また、「切り売りされる文化」という視座は本質的な文化を前提にしており、観光の場で呈示される文化を「切り売り」と批判する風潮が初期の観光研究では頻出した。これはそうした前提を疑問視するための「自省」を伴った議論として位置づけられ、現在は観光の担い手による文化の生成や、そこで新たに形成される観光の文化が注目されている。
- 4) しかし一方で橋本(1999)のように、観光研究が「「国家・民族」の議論の中に埋め込まれ、その単なる一つのトピックにしかすぎなくなるのではないか」との危惧から観光独自の現象を追求しようとする試みがあることについても附言しておく。ただ、橋本自身はこの著作以降はこうした取り組みについて言及することは少なくなってきている。
- 5) ここでよく論じられるのは少数民族が漢民族に成り変わっている事例であろう。ただし、それだけでは漢民族 - 少数民族の対立軸に陥りかねない。他にも、ある少数民族を他の少数民族で「まかっている」場合も多くあらわれている。また、この場合に限り「保有者ではない」ということ自体、本質主義的な色彩を帯びる可能性を多分に有しており、ともすればこの文脈における「他者」を「正統でない」ものとして扱い、当の「保有者」を祭り上げる語りは避ける必要があることは論を待たない。「民族」という公定の類型を前提条件として追従することはこの点において危うさを有する反面、国家の場として表出する「民族観光」の場自体を否定することもまた現実を遠ざける。したがって、ここでは従事者のパフォーマンスを「加担」として捉える立場を採る。
- 6) また、観光案内には「13民族」と記されていても

書籍によって記述に差異が見られる。例えば『景洪県志』では「13民族」と記されていても隣接する『勐海県志』では「25民族」と記されている。一方、観光関係者や住民に州内の民族数とその構成について質問しても「把握」している人間はほとんどいない。

- 7) こうした漢民族移住者の流入過程の詳細な分析は菅野(1995)(1998)を参照。とりわけ、菅野は「盲流」や「民工潮」として流入した漢民族移住者がタイ族の竹楼の床下に居住した歴史的な過程を念に考察している。
- 8) なお、1986年における観光客数は海外旅行者が4437人、国内旅行者が3802人を記録している。
- 9) また、征鵬(2002)によれば西双版纳に居住する「13民族」は古くからこの地に居住してきた民族であり、その他の諸民族は「外来民族」であるとしている。こうした文言も、西双版纳を対外的に「整った」地域であることを承認させるための言説であると考えられる。実際、多くの諸民族は北方から南下し定住した事例が多く、中国国内の学説においてもこうした史実を説明する論者がほとんどである。
- 10) 筆者は1999年の開園当時にこの地を訪れている。開園当初は、現在とは異なり音楽隊による演奏や教典を竹に彫り込む僧などの演出は一切見受けられなかった。もっぱら家の前で観光客を出迎えることが(そして土産物を販売することが)村落住民の観光客に対するアプローチの全てであった。当時、団体客を乗せた観光バスは駐車場から直接寺院へ向かうことが多く、村落訪問は観光客次第だったが、今ではガイドの案内により、団体観光客は必ず村落内を横切るようにして寺院へ向かうように設定されている。
- 11) ただし、「西双版纳化」は、観光活動のなかで民族の一体化に向けたベクトルが働いていることその他に、こうした様相がすでにあらわれていた可能

性もある。征鵬(1999)によれば、ラフ族の新年祭「拉枯扩」では「祭りの期間、友人や近隣の村落に住む漢、タイ、ハニ、プーラン族などの群衆と皆で祝う」と記されていることからわかるように、単独の民族ですべての習俗や風習が醸成されたと断言できる明確な理由がない。こうした歴史的側面については触れることができなかったが、この事例であげた「三跺脚」の起源の問題については今後の課題としたい。

文献

- 李長鳳．1995．「西双版纳旅遊発展之我見」『版纳社科』1995(2)
- 長谷川清．2001．「観光開発と民族社会の変容 - 雲南省・西双版纳傣族自治州」『現代中国の民族と経済』世界思想社。
- 景洪県地方誌編纂委員会編．2000．『景洪県志』雲南人民出版社。
- 菅野博貢．1995．「中国・西双版纳タイ族自治州への漢族移住とその社会的影響」『アジア経済』36(4) アジア経済研究所。
- ．1998．「人口流動化による民族混住」『アジア経済』39(4) アジア経済研究所。
- 兼重努．1998．「エスニック・シンボルの創成 - 西南中国の少数民族トン族の事例から - 」『東南アジア研究』35巻4号。
- 川森博司．2001．「現代日本における観光と地域社会 - ふるさと観光の担い手たち - 」『民族学研究』66巻1号：80。
- 村上勝彦、橋谷弘他．1997．「中国雲南における観光開発と環境問題 - 1996年度調査報告(1)」『東京経済大学誌』第205号。
- 太田好信．1993．「文化の客体化 - 観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57巻4号。
- 橋本和也．1999．『観光人類学の戦略 - 文化の売り

西双版纳傣族自治州的民族観光における文化表象の交錯

方・売られ方』世界思想社.

Smith,Valenne L. 1989. “Hosts and Guests : The Anthropology of Tourism”, Philadelphia : University Of Pennsylvania Press.

西双版纳報社 . 2002 . 「傣族園表彰 『綠色家園』 示範戶」『西双版纳報』(7月12日)

西双版纳傣族自治州統計局編 . 1998 . 『西双版纳傣族自治州統計年鑑1998』.

山下晋司 . 1988 . 「国家的過程のなかの民族文化 - インドネシア、トラジャにおける伝統文化の現代的位相」『国立民族学博物館研究報告』13卷1号.

中共西双版纳州委党史征集研究室編 . 2000 . 『西双版纳五十年』雲南民族出版社.

中華人民共和国国家統計局編 . 2002 . 『中国統計年鑑2002』中国統計出版社.

中国科学院地理研究所・雲南省景洪市旅遊局編 . 1998 . 『景洪市旅遊資源』四川教育出版社.

征鵬 . 2002 . 「州興旅遊要在特色上下功夫」『版纳』<版纳>雜誌社.

征鵬、揚勝能編 . 1999 . 『新編西双版纳風物志』雲南人民出版社.